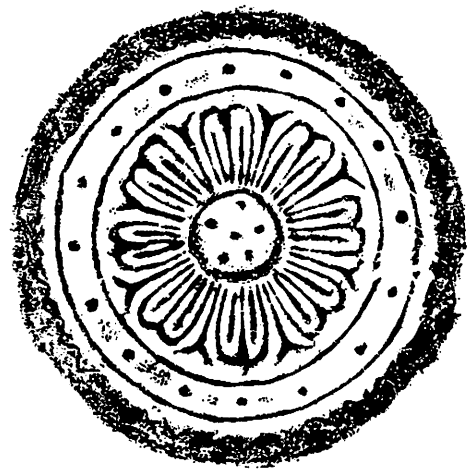
安芸国分寺跡 —第２次調査概報—



１９７１年３月

広島県教育委員会

安芸国分寺跡 —第2次調査概報—

目　　次

Ⅰ　昭和46年度発掘調査の概要 …… 5

Ⅱ　遺　　構 …… 11

　1　中　門　址 …… 11

　2　廻　廊　址 …… 12

　3　講　堂　址 …… 13

　4　築　地　址 …… 14

　5　溝状遺構 …… 16

Ⅲ　出土遺物 …… 18

Ⅳ　ま　と　め …… 22

図版 1

a　中門址南辺基壇

b　同　上　部　分

図版 2

a　講堂址北辺基壇

b　同　上　部　分

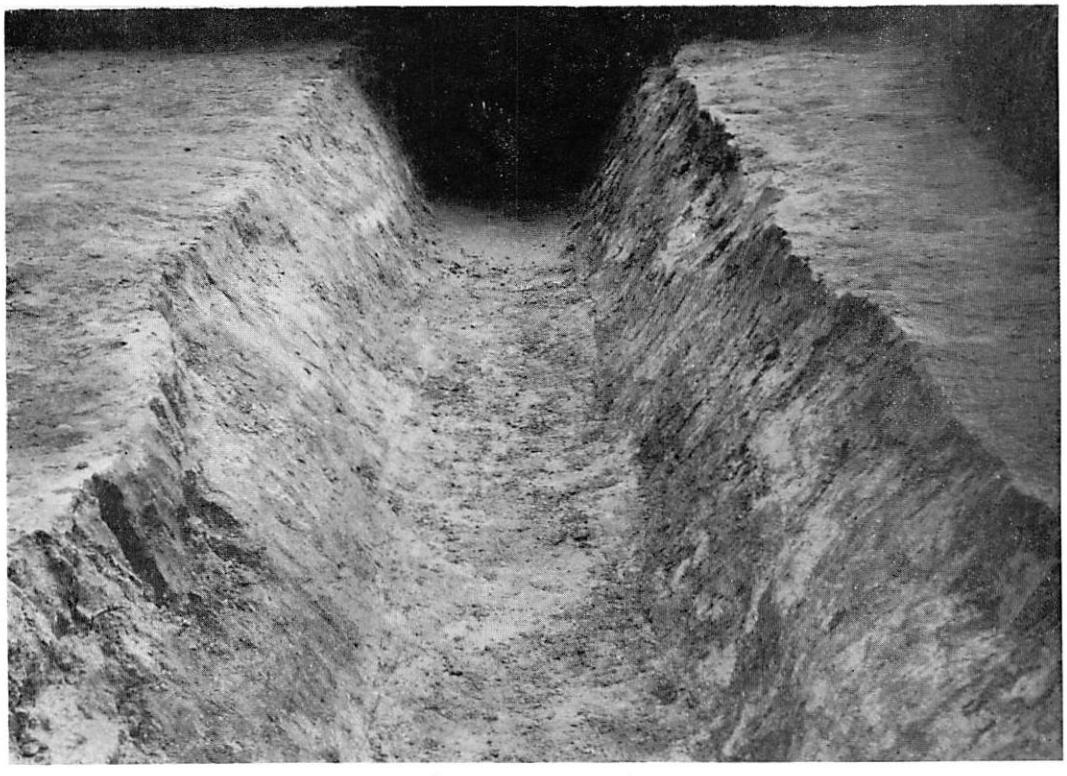
図版 3

a 築　地　址

b 同 上 部 分

図版 4

a 溝 状 遺 構



b 同 上 部 分

I　昭和45年度発掘調査の概要

a　調査の概要

この調査は，文化庁の補助のもとに昨年にひき続いておこなった安芸国分寺跡第2次発掘調査である。

昨年度は，寺跡及びその周辺の地形測量図の作製と，南大門，中門，築地の調査をおこなったが，本年度は，築地，講堂，回廊，中門の一部を調査するなかで，国分寺の伽藍配置を明らかにし，寺域の確認をめざして発掘調査をおこなった。その結果，北辺築地の土壇跡，講堂址北辺基壇，中門址西側部分，などの遺構を検出し，国分寺の北限を確認することができた。しかし，全般的に遺構の保存状態は良好とはいえず，各伽藍の正確な位置はなお明らかでない点が多いので，来年度の調査にまちたい。

調査は広島大学の松崎寿和教授を団長とする調査団を編成し，昭和45年11月26日から12月12日までの17日間実施した。

調査団はつぎのとおりである。

（長）　松崎　寿和　広島大学文学部教授，広島県文化財専門委員
　　石田　　寛　　〃　　助教授　　〃
　　潮見　　浩　　〃　　助教授　　〃
　　本村　豪章　東京国立博物館文部技官
　　川越　哲志　広島大学文学部教官
　　西本　省三　広島県教育委員会専門員兼文化財係長
　　河瀬　正利　広島県教育委員会文化財保護主事
　　金井　亀喜　　〃　　指導主事
　　伊吹　　尚　　〃　　〃
　　是光　吉基　　〃　　〃
　　山県　　元　　〃　　〃
　　脇坂　光彦　　〃　　〃
　　鹿見啓太郎　　〃　　〃
　　中田　　昭　　〃　　〃

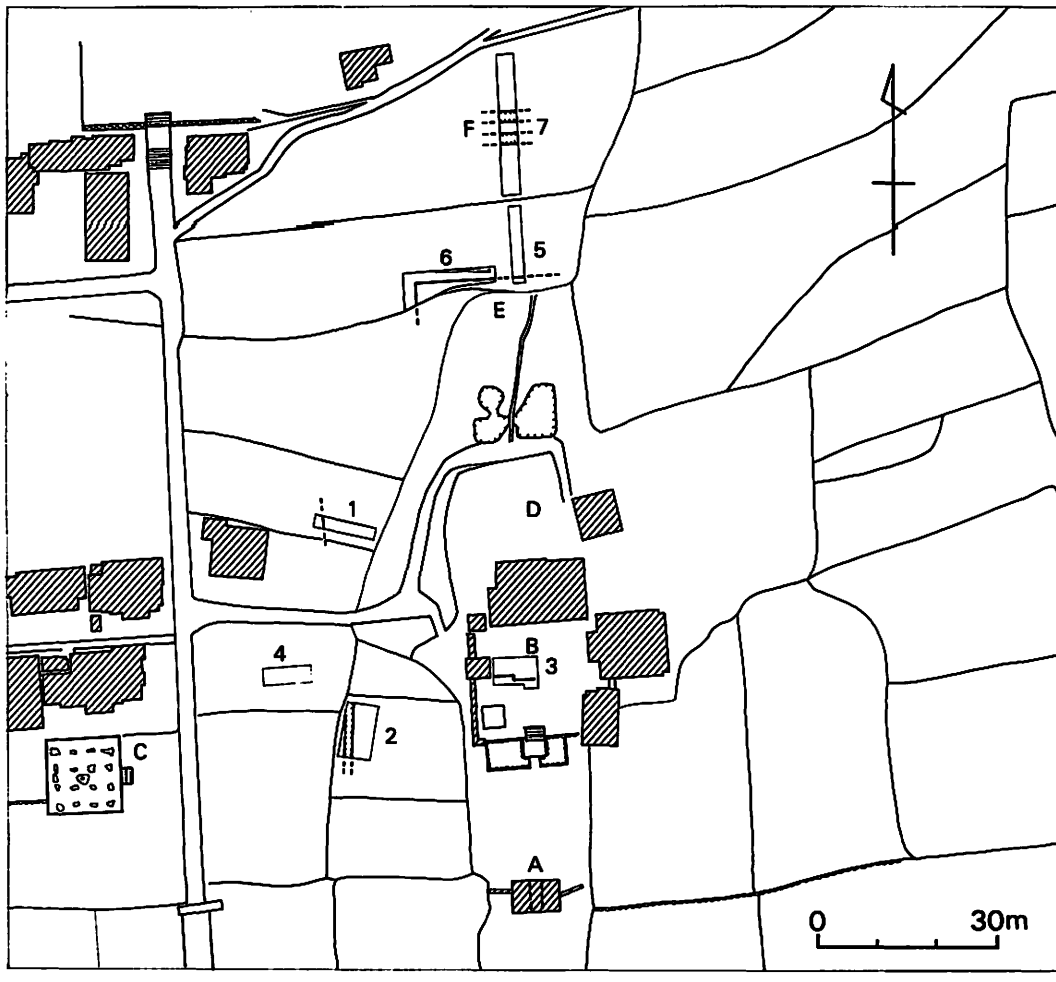
調査にあたっては，有元浄信（国分寺住職)、今村一也，西条町教育委員会，それに地元の方々の多大の協力をえた。

また出土遺物の整理にあたっては，向田裕始君（立正大学学生）の協力をえた。ここに厚くお礼申しあげる。　（脇坂光彦）

b　調査区の設定（第1図）

昨年度の調査に引続いて，今年度は現国分寺境内の西側で，創建時の遺構を検出することとともに，寺域の北端を検出することを目標に，つぎのように，調査区を設定した。

第1トレンチ―庫裡の北側の礎石群（金堂址？）の西側の水田の畦畔をコンクリー



第1図　調査区配置図（A……南大門址，B……中門址，C……塔址，D……金堂址？，E…講堂址，F……築地址）

ト製のものに改める際に，ここに古瓦のぎっしりつまった部分が約5mにわたって存在することが観察されたが，この古瓦の堆積の性格をつかみ，同時に廻廊跡を検出するために畦畔に平行にはば2m長さ11mのトレンチを設けた。

第2トレンチ—中門より金堂につながっていたと予想される回廊を検出するために，中門跡と塔跡の間の水田をボーリングしたところ，はば約1m，南北にはしる落ち込みを認め，この遺構を求めて，ほぼ南北に，はば5m，長さ9mのトレンチを設けた。

第3トレンチ—昨年度の調査において，中門跡と推定した遺構の西側の空地いっぱいに，昨年度階段状の遺構が検出された場所にくいこむ状態で，トレンチを設け，この遺構の両端部の検出を行なった。

第4トレンチ—廻廊跡を検出するために，第1区より約23m南，第2区の北西の水田に，はば3m，長さ8m，東西に長いトレンチを設けた。

第5トレンチ—現国分寺の境内の北側の水田の畦畔に石田茂作博士が講堂跡のものとされている3個の礎石があるが，この礎石のもっとも西寄りのものを中心にして，東西へそれぞれ1mずつとって，方向は昨年の調査において推定した伽藍中心線の方向にそって，水田を横断する長さ13mのトレンチを設けた。

第6トレンチ—第5区の南端において講堂の基壇の北辺と推定される遺構が検出されたので，第5区の両端から3mのはばをおいて，長さ15mのトレンチを東西方向に設け，第5区において，検出された遺構が講堂の北辺基壇として，妥当であるかどうかを検討した。

第7トレンチ—寺域の北端を検出するために，第6区の北側の水田に，東側の線を第6区のそれの延長上において，はば3mのトレンチを北へ23mのばした。

（伊吹　尚）

発掘調査日誌抄

1970年

11月26日（木）雨

朝広島を出発し，賀茂郡西条町の国分寺跡へ向う。現地で調査のすすめ方を協議し，築地，講堂，回廊，中門の確認調査のためトレンチ設定個所を選定した。

11月27日（金）くもり時々雨

現国分寺庫裡の西側の水田で，昨年ボーリングによって多量の瓦が埋蔵しているこ

とを確認していた個所に第１トレンチ（２m×11m）を設定し，排土にかかる。褐色の粘土質土層が遺物包含層となっており，特にトレンチの西半分には多量の瓦が埋積しているのが観察される。

11月28日（土）晴時々くもり

第１トレンチ―瓦はトレンチ全面にわたって分布し，特に西側部分に多いことがわかった。

第２トレンチ―中門からとりつく廻廊を想定して２m×３mの調査区を設定した。トレンチの中央部をほぼ南北に黄色土と暗褐色土に分ける線があらわれた。

11月29日（日）晴時々くもり

第２トレンチ―南北の落ち込み線を追求するため東に３m，南に６m拡張したところ，トレンチ西側の畦畔にそって南北に幅約1.3mの溝が走っていることがわかった。

11月30日（月）晴時々小雪

第１トレンチ―第２トレンチで検出された南北の溝がこのトレンチでどのようにあらわれるかをみるため東の畦畔いっぱいにトレンチを拡張して全体を掘り下げる。瓦を多量に含んだ層の下は黄色土となっており，地盤とおもわれる。この黄色土は東から西に緩やかに傾斜しているが，第２トレンチと続く溝状のものは何ら見い出せない。

第２トレンチ―溝の部分を掘りさげた結果約60cmの深さで白色粘土に達し，地盤と考えられた。U字状の溝で，創建時のものとおもわれる軒丸瓦片，軒平瓦片が出土したが他にかなり時期の下る瓦片も出土しておりこの溝の築成の時期については，はっきりとしない。

12月１日（火）晴時々くもり

第１トレンチ―地盤の黄色土は東から西に緩やかに傾斜していたが，西側部分の観察では一旦落ち込み，さらに瓦の最も多量に堆積していた部分で一段と高くなってそのまま西壁に達していることが観察された。廻廊基壇部の可能性がある。

第３トレンチ―回廊と中門との取りつけ部分をみるため，昨年調査した現国分寺庫裡の前の空地の西側よりにトレンチ（第３区）を設け掘りさげる。

12月２日（水）くもりのち雨

第３トレンチ―トレンチの東端に昨年調査した個所があらわれ，それに続いて二段になった階段状の固い面が東西にみられた。トレンチの東壁から約２m西にのび，この端には南北に石が並べられていることが観察された。この基壇は，現在の阿弥陀堂の下まで続いており西端をあきらかにすることができない。

12月3日（木）晴

第3トレンチ—清掃をし，写真撮影をおこなった。

第4トレンチ—廻廊の規模を確認するため，第1トレンチの西端部分を廻廊と考えて，中門址から西へのびる線との交点付近に3m×8mの調査区を設定した。推定では西側廻廊の南コーナーにあたる。耕土下の褐色土から須恵器片や瓦が出土したが，その下層は黄色土の地盤である。黄色土はトレンチ東端から約2.3mで急に落ち込み，そのまま西にのびている，この東側の高い面が廻廊基壇と考えられるがコーナーは確認できない。

12月4日（金）晴

第5トレンチ—講堂址と推定される国分寺境内北側の水田に，幅2m，長さ12mの南北に長い調査区を設定した。トレンチ南端部において耕土下約60cmで基壇と思われる黄褐色土に達し，これが南から北へ落ち込んでおり，落ち込み線は東西方向に走っているのが認められた。この落ち込みは基壇上面から深さ約30cmあり，基底部には基壇に使われたと思われる石が数個みられた。トレンチ南端から1.6～2mのところには，トレンチ西壁に入りこんだ径約3mのピットがあり，その底からは完形の蓮華文軒丸瓦が1個出土した。またトレンチ南端から北に約7.5mの中央では，50×70cmの礎石らしい石が1個あらわれた。

12月5日（土）晴

第6トレンチ—第5トレンチで東西方向に基壇が推定されたので，これを追って西側に，東西14mの長さのトレンチを畔にそって新たに設定した。まずトレンチ東側の南畔よりに耕土下，60～70cmの深さで石列にあたり，これが西にのびていることがわかった。この石列の北側は落ち込んでいるようだ。本日の作業では石列の西端を確認するにはいたらなかったが，どうやら講堂の北辺基壇とおもわれる。

12月6日（日）晴

第6トレンチ—石列の西端を検出する作業をおこなった。その結果，石列はトレンチ東端から約13m西へのび，そこから南へほぼ直角にまがることがわかった。石列の南側は黄色土の固い土で基壇面と思われ，北側石列土面より約30cm落ち込んでいる。石列はその東側部分では2～3段の乱石積となっているが，西側部分では石が縦に1個ずつ立てて並べてあり，また基壇の北西隅には石はなく，石が抜きとられたものとみられる穴が検出された。北西隅から南へのびる基壇には北側の石積みのようにはなっておらず，小さな礫が基壇面にはりついているだけであった。

12月7日（月）晴

講堂址—石積基壇北側の落ち込みを掘りすすんだところ，トレンチ北壁ぞいで東西方向に幅約40cmの溝状遺構があらわれた。石列と平行しているところから雨落溝とみられた。また，トレンチの東壁にそって基壇のすぐ北側からさらに北にむかつて数個の石がのびている。トレンチを東に拡げる余裕がないのでどういつた性格のものかわからない。

第7トレンチ—講堂の北側の遺構を調査するため，第5トレンチの北側へ3m×23mの調査区を設定して排土をはじめた。

12月8日（火）晴

第7トレンチ—トレンチの南端から約9mと約13mを中心に2本の溝が平行して東西に走っているのがみられた。いずれも深さ約30cmであるが，北の溝の北側と南側はさらに落ち込んでいるようである。溝からは多くの瓦や須恵器，緑釉陶器片などが出土した。南北の溝にはさまれた幅約1.7mの黄色土の部分は，ほぼ平坦になつており築地とおもわれ，寺域の北限にあたるものと推定された。

12月9日（水）晴

第2トレンチ—写真撮影終了後，実測をおこなった。

第4トレチ—写真撮影終了後，断面の実測をおこない埋めもどしにかかる。

講堂址—清掃後，写真撮影をおこない実測にかかる。また100分の1の調査区配置図を作成していった。

12月10日（木）晴

第1トレチ—写真撮影終了後，断面の実測をおこなった。

中門址—平面および断面の実測を完了して埋めもどしにかかる。

講堂址—昨日に引き続き実測をおこなった。

築地址—写真撮影終了後，実測をおこなった。

12月11日（金）晴

第1トレンチおよび第6トレンチの実測を完了し，埋めもどしにかかる。

第7トレンチ—写真撮影後，実測をおこない，埋めもどしにかかる。

築地址—実測終了後，埋めもどしにかかる。

12月12日（土）くもり一時雨

全ての調査区の写真撮影・実測をおわり，埋めもどしをおこない，調査を終了した。

（脇坂光彦）

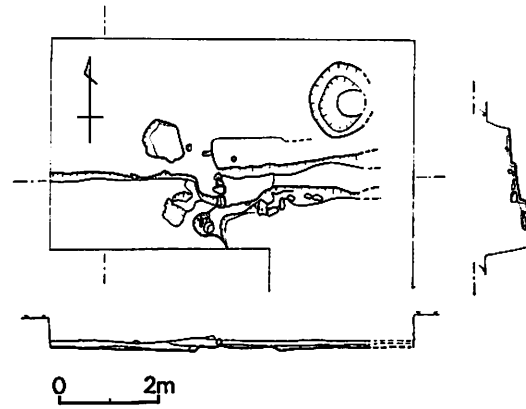
Ⅱ 遺　　構

1 中　門　址（図版1，第2図）

昨年度の調査であきらかにされた階段状基壇の西側に東西2.5m，南北4.5mのトレンチを設け，また東側に南辺から南北2.5m，東西2.5mの拡張区を設けて，昨年度調査した階段状基壇に連続して，その西側部分を調査した。

階段状基壇はトレンチの東端から約2mのところまで連続しており，上段は幅約60cm，高さ約10cm，下段は幅約50cm，高さ約15cmの基壇で，下段の基底部からトレンチの南辺までは約20cmのゆるやかな傾斜をもつた赤褐色土が続いている。

階段状基壇は，上，下段とも風化した厚さ約5cmをはかる花崗岩質の土によって堅く踏みしめられている。上段の基壇には，その風化した花崗岩質土の西端から約40cm，南辺から約15cmのところに，約8cm，深さ約10cmで底の平坦な小穴がみられ，門に使用された扉の軸受けの穴かと思わせるものがあった。



第2図　中門址南辺基壇実測図

またこの階段状基壇の西端には，長さ8～22cm，幅10～24cmの角礫を南北に6個，その内，上段の端に1個，下段の端には5個並べられていた。また，下段の基壇の南西端には約30cm巾20cmの角礫が1個みられ，角礫をはさんだような形で瓦がその上に集積していた。

下段の基底部には昨年度の調査でも角礫が並べられているのがみられたが，今回の調査ではこれに続くものがあきらかになった。

基壇の上面には基壇の南辺から約30cm，階段の西端から約50cmのところに南北径約85cm東西径約80cm，深さ約15cm程度のほぼ円形をしたピット1個がみられ，その東隣りに径10cmの小穴が1個所みられたが，根石等の存在は全くみられず，直ちに柱穴と

することはできない。

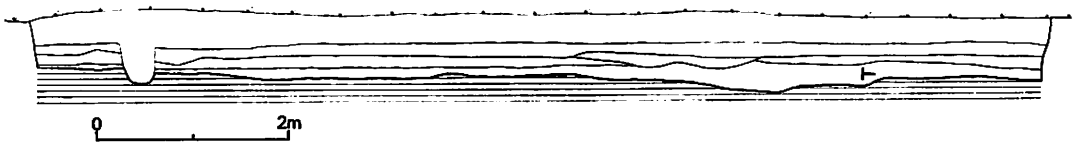
また基壇の下端，東基部には小穴がみられるが，深さも浅く礫石もみられず，人為的な遺構というよりもむしろ自然的なものと思われる。

西壁の断面から観察すると基壇となる赤褐色土は，トレンチの南辺から北約30cmのところより南側に傾斜しているがこの赤褐色土中には比較的新しい瓦を混入しており，南端部に特に多く集積していた。しかも階段の下段の基底部に挾まっていた瓦も比較的新しいものと思われるので，これらの遺構が中門址としても，創建時のものかどうかはあきらかでない。（中田　昭）

2　廻　廊　址（第3図）

西側廻廊址を検出するために，現国分寺本堂の西側，塔址との間に2つのトレンチを設定し，北側を第1トレンチ，南側を第4トレンチとした。

第1トレンチは幅2m，長11mと東西に長く設定した。層序は，耕土約25cm，床土約20cm，暗褐色のよくしまった層約10cmとほぼ平面的連続をなしていた。ただ，第3層の暗褐色土層はトレンチ西側において，幅約2mにわたって灰色の砂質土により溝状に切断されていた。第3層以上で古瓦類，土器片等遺物の含有が顕著でなく，この溝状遺構をもって廻廊に付随するものとはしがたい。



第3図　第1トレンチ南壁断面図（⊢ 廻廊基壇？）

さらに下層の炭化物を含む褐色土層中には，古瓦類の堆積が多く見られ，何らかの遺構の存在が想定された。瓦の堆積は東側より西側の方が多いようである。この瓦層の下は地山とされる黄褐色粘質土で，地表下約70cm程度のところをほぼ水平に走っていた。

南側壁面の観察によれば，トレンチ西端より東へ5mの部分において西へ向ってわずか10cmばかり地山上面の線がダラダラと落ち込んでいた。さらにその線はトレンチ西端より2mの部分でやや急角度に10cm程上昇し，そのまま水平に西側壁面へと入っていった。このあたりでは特に瓦の堆積が多く，可能性として，この地山の落ち込ん

だ部分をもって溝とみなし，西側の地山の上った部分を，廻廊基壇最下部の地山修正痕と考えることができる。しかし全体のレベル変動が10cm内外であるので，あくまで可能性の問題にとどまる。

また，第4トレンチは廻廊の西南隅を追求するために設けたが，何ら明確にできなかった。遺物もごく少量の瓦片，土器片のみであった。　　（鹿見啓太郎）

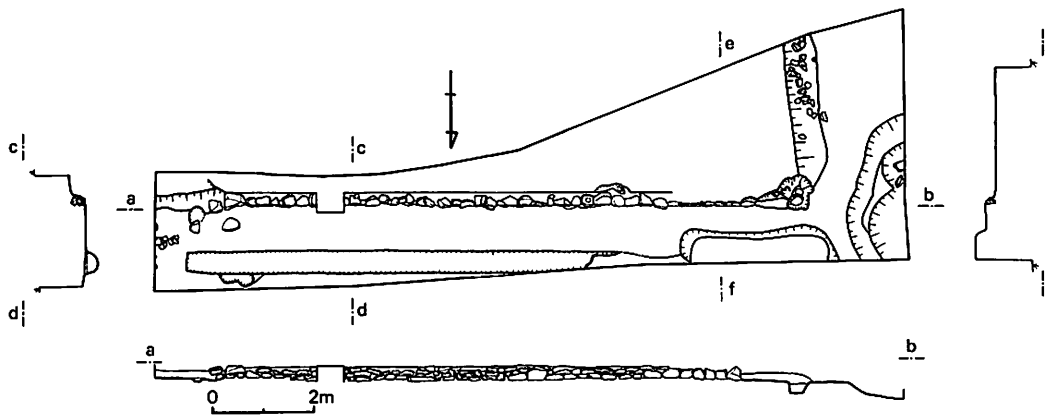
3　講　堂　址（図版2，第4・5図）

第5区，第6区において，基壇の北辺を約18m，西辺を3.4mと北西のコーナーを確認した。

基壇は石積みのもので，その北辺についてみると，北西コーナーより東へ約13.5mの点から，東へ約10mの間は積石の残存状態が良好であるが，それより東側においては石積みは失われている。西辺には，10～20cm大で北辺の積石よりやや小型の石が30個余り残っているが，その配置には一定性がない。

基壇は，第5区西壁の断面でみると，地山を約15cm掘りこんで，その上に版築と思われる盛土をし，周囲に25～30cm大の花崗岩を積んでいる。

積石は，北西コーナーより東へ1.35m～2.40mの間は扁平な石を6枚立てているがそれより東側は厚さ10～15cmの小石をそろえて2～3段積み上げている。積石の高さは20～30cmをはかる。



第4図　講堂址北辺基壇実測図

北西コーナーより，東へ1.35mの間には，積石を抜き取った穴が残っている。その状態から推定すると，幅25～30cmの石が3～4枚立ててあったらしい。またコーナー

には直径約40cm，深さ約35cmの抜きとり穴があり，この部分には，やや大きめの石がすえられていたと推定された。

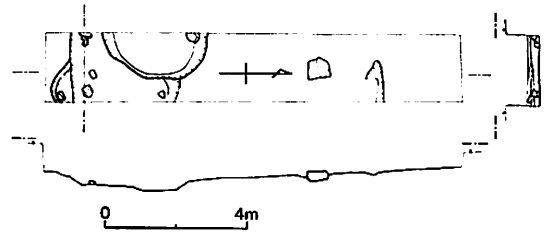
基壇の西辺では，北辺にみられるような規則的な積石は残っていないが基壇の上面をなす赤褐色粘土が約20度の傾斜をもって，西側に下降している。

基壇の上面は，現地表下約67cm下にあるが，第5区の南端，畦畔中にある礎石の上面との差は約16cmをはかり，本来の基壇上面は，礎石の上面だけを出していたものと考えるならば，現在の上面より12～13cm前後高かったものと推定でき，本来の基壇高は約45cm前後となろう。

北辺基壇より約90cm北には，幅約45cm，深さ約30cmの溝状の遺構が，基壇とほぼ平行に走っており，雨落溝と考えられた。北辺基壇南側の水田の畦畔に認められる3個の礎石を結ぶ線とこの溝の中心との距離は約2.8mをはかり，軒の出が9尺余りの建物が想定できる。

今回の調査は北西部分に限ったため，講堂址の南北，東西基壇の規模をあきらかにはできなかったが推定伽藍中心線などから考えて，東西90尺，南北50尺以上の基壇規模をもつものと推定されよう。

また，第5区においては，講堂の北辺基壇より約7m北に60cm×55cm，厚さ25cmの上面の平坦な礎石とみられる石が検出され，何らかの建物の存在が想定されたが今回の調査ではこれの性格をあきらかにすることはできなかった。



第5図　第5トレンチ実測図

（伊吹　尚）

4　築　地　址（図版3，第6図）

寺域の北限を確認するため，講堂基壇が検出された水田の北側に，第7トレンチを設定した。この調査区は，水田面が講堂基壇の検出された水田面より約70cmばかり高くなり，ほぼ伽藍中軸線が通過すると思われる部分に当り，幅3m，長23mと南北に長くした。講堂北側に存在する建築跡の有無確認をも目標とした。

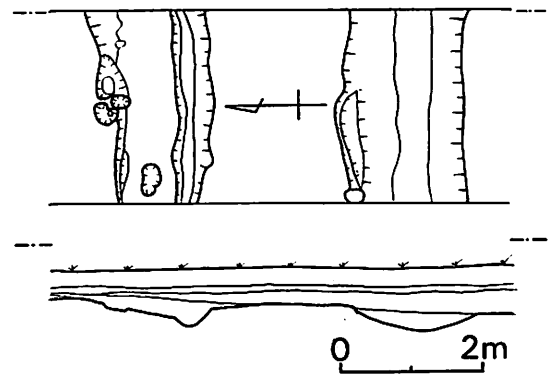
調査区南端部においては，地表下1mの部分に，黄褐色粘質土の地山とされる面が出た。その間には，耕作土20cm，床土30cm，よくしまった灰褐色の砂質土50cmと層序が確認され，基壇らしきものは見られなかった。地山は北側に向って，緩やかに上昇

しており砂質土層より，土師器，須恵器等の細片が少量検出された。

調査区南端より17m，地表下70cmの地点において，暗褐色土があらわれ，地山の線と一線を隔しており，この地点で平面的観察を行なうと，北側に地山が出て，さらに暗褐色土が出てきた。この結果２列に並行して東西に走る溝状遺構とおもわれた。これらの２本の溝内には，暗褐色土が堆積し，瓦，炭化物，須恵器，土師器等の破片が多く，緑釉陶器片も含まれていた。

南側の溝は，幅1.8m，深さ35cmのＵ字溝で掘り方がはっきりしたが，それより1.7m隔てた北側の溝は北縁がかなり乱れていた。この溝は２段造りになっていて南よりが深くなっており、幅約1.8m，深さは30cmあった。

溝は，調査区の幅が３mと狭いので，方位は確認できないが，調査区内で見る限りは，講堂北縁基壇とほぼ並行し，主軸と直行するようである。



第７図　築地址実測図

この結果，この遺構は，２本の溝を両側に取りつけた築地跡と推定できた。溝は石材，その他の物を使用した痕跡は認められず，地山を素掘りしただけの簡単なもののようであり，２本の溝に狭まれた部分は低平で，平均幅1.8mである。この上部に盛土を施し，屋根瓦を敷く等の構築物が想像されるが，削平されたものらしく不明である。築地中心部より，２本の溝中心部までの距離は，約1.8mであることから考えれば軒先90cm程度の築地を想定することができよう。後世の攪乱も加工修正の跡も認められず，溝内出土の土器片や古瓦類も布目文様の検討から古式なものが認められるが，なかには比較的新しいとされる土器片，古瓦類も検出されることから，創建時より長期間にわたって存続したものと考えられる。

また，築地中心部は，講堂基壇北辺より24m離れており，石田茂作博士が寺域北限とされていた，今回調査区を設定した水田の北側にある道路付近より10数m南であることがあきらかになった。このことから昨年度調査した南大門跡や南側築地跡を創建時に近いものとすれば寺域の南北は約128m（422尺）となる。なお築地址の西端，東

端の状態については，昭和46年度の調査によりあきらかにしたい。（鹿見啓太郎）

5 溝 状 遺 構（図版４）

塔址の東約50m，中門址と推定される位置の西約25mの水田中にボーリング調査による地山の落ち込みがあることから，南北の畦畔にそって東西２m，南北３mの第２トレンチを設定した。耕土下を20～25cm掘りさげたところ，トレンチのほぼ中央部から西側部分に暗褐色土の落ち込みが南北方向にみられた。この南北にのびる落ち込みを追ってトレンチを東に３m，南に６m拡張した。その結果，U字溝であることがあきらかになった。

溝は黄色土から切り込まれており，幅130～150cm，底部幅50～60cmのU字状をなして南北にのびている。溝の深さはトレンチ北壁部で65cm，南壁部で116cmとなっており北から南へと傾斜している。

溝の東側の黄色土には，トレンチの北壁から３～3.3mのところで東西方向に３～５cmのわずかの落ち込みがみられ，南側が低くなっている。この東西の落ち込み線の延長は，東ではトレンチの東壁に入っているが，西は溝までは達しておらず，溝から約50cm東の部分で消えて南北の高低差はなくなっている。また，トレンチの北壁から5.8～6.1mのところで，さらに東西方向に７～10cmの落ち込みがみられ南側が低くなっている。

また，ほぼ中央部でトレンチの東壁側に深さ約30cmの掘り込みがある。この掘り方は南北幅約1.5mでトレンチ東壁から約1.8m西までのびており，トレンチ東壁からはさらに東に続いているようである。この掘り方の中の西よりには，東西1.4m，南北1.3mの範囲で一段と深くなっており，深さは約50cmをはかる。Pitの下端は東西1.15m，南北1.1mのほぼ円形の平面をなしている。この深い Pit の中からは，創建時のものとおもわれる平瓦類が出土しているが，底には根石のようなものは認められない。

南北の溝は，上面から鉄分を含む暗褐色土，灰褐色粘質土，砂と粘土の混入した黄白色土となっており，底部には白色粘土が一面に認められる。暗褐色土の層には新しい時期の軒丸瓦や軒平瓦，平瓦が含まれ，昨年南大門跡で検出された瓦で土管状に使用されていたものと同時期のものと思われる。また，底が黒く煤けている土鍋もこの層から出土している。灰褐色粘質土からは奈良期の蓮華文軒丸瓦１，唐草文軒平瓦２，須恵器片が出土しているが，この上の暗褐色土層と必ずしも層位の差は明確でない。

南北の溝は北から南に傾斜しているが，この溝が北側から続いてきているとすれば，第１トレンチにあらわれるはずであるが第１トレンチにおいてはそれらしい溝は検出されなかった。またトレンチの溝の南北線は磁北に対して４度東に振っていることからみてこの溝は創建時の国分寺伽藍配置と直接の関係はなさそうである。

（脇坂光彦）

Ⅳ 出 土 遺 物

瓦 （第７図）

今年度の調査では，昨年に引き続き瓦類も多くの資料を得たが，形式的には既に発表されているものと大差はない。以下今年度分に限って紹介しておく。

軒 丸 瓦（第７図１～３）

１は複弁蓮華文軒丸瓦で昨年度調査及び以前にも数多く検出された瓦である。瓦当面径は14.5㎝，完形であるがやや小さい。内区は小さい中房に１＋５の蓮子を持ち，弁端がやや隆起した細い稜線の，８葉の複弁である。外区は２本の圏線の間に16個からなる小さな珠文が廻り，外線には外向の鋸歯文が廻っているものである。全体として繊細な線で画かれ，胎土，焼成も良好であることなど，寺院の創建に際して使用されたものと思われる。

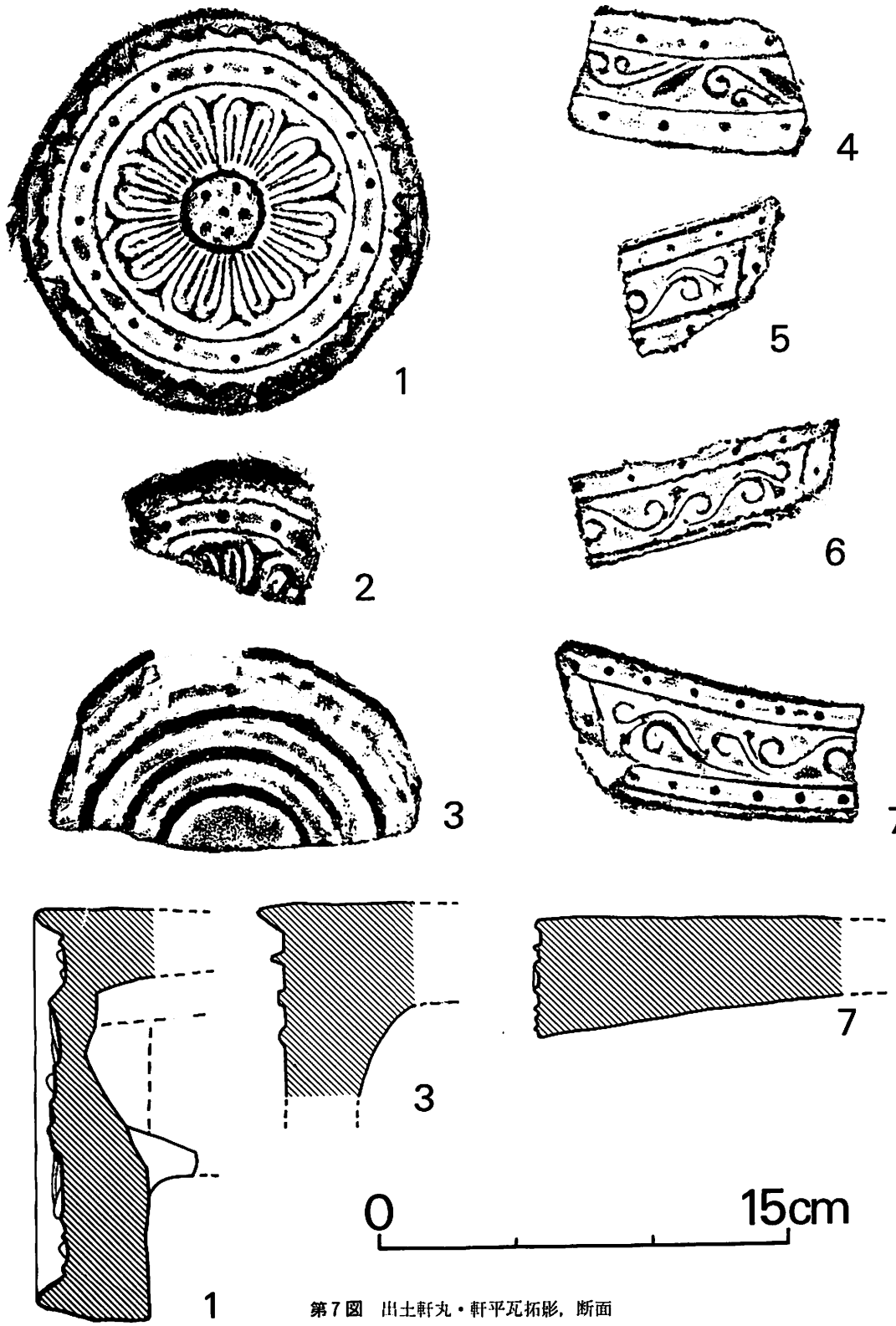
２は破片であり全体は推測にすぎないが，１と同じく，複弁蓮華文軒丸瓦である。珠文は１に比べやや大きい。

３は重圏文軒丸瓦で，整然と配置された４重の圏線から成り立っている。復元推定径は16㎝で，内側の３本の圏は低く，外縁に相当する４重めのものはやや高くなっている。備後国分寺出土の同種のものに比し，圏線は細く，且つ備後国分寺のものは中央に珠文を配置しているが，これには無く，やや古い様式を示している。類例は，近くの安芸郡府中町の下岡田遺跡出土の重圏文軒丸瓦がある。下岡田遺跡では対になる重孤文軒平瓦が出土しているが，国分寺からは発見されていない。胎土，焼成も良好である。

軒 平 瓦（第７回４～７）

４は均正唐草文軒平瓦で，瓦当面が左側２分の１以下なので，中心部が不明であるが，以前の調査による類例から考えると，中心飾に の文様を持ち左右に各々３転する流麗な唐草文を持つものであろう。外区に珠文帯を有し，無顎である。軒丸瓦１と対をなすものであろう。

５も右端部のみが残っており，唐草文様がみられる。珠文が廻っており，４と同形式のものであろう。



第7図　出土軒丸・軒平瓦拓影，断面

6は右側4分の1のみの出土で,全体は不明であるが,これも以前の調査で出土の唐草文軒平瓦との比較により,中心飾に の文様を持つ均正唐草文軒平瓦であろう,外区に珠文帯を持ち,唐草文は4よりかなり硬化している。やや時期が下ると思われる。

鬼　　瓦

破片であるが，左肩部に相当すると思われる。外帯は幅のせまい1重の圏線で，内側に珠文が廻っている。内部は蓮華文になるか，鬼面文となるか不明である。やや薄手で，胎土，焼成とも良好である。　　（鹿見啓太郎）

須　恵　器（第8図2～8）

北辺築地址，講堂址，第5トレンチ Pit で集中的に出土した。杯（碗）類が多く，蓋，壺形土器も出土している。

杯―平底のものと，高台付のものに区別される。2は講堂址から出土したもので，器高3.2cm，口径12.6cm，底径6.5cmの大きさである。平底であり，底部から胴部へかけての立ちあがりはゆるやかで，胴部はわずかに丸みをもっている。また，底部から胴部に移る境には,幅1mmの凹線が1本めぐっている。灰色を呈し,焼成は良好である。

3は北辺築地址から出土したもので，器高3.2cm，口径12.6cm，底径8cmの大きさである。平底の底部と胴部との境が明瞭であり，底部，胴部とも内外面に水ひき痕がある。底は縁から中央部にかけていく分上り気味の上げ底ふうになっている。暗灰色を呈し，焼成は良好である。

7は北辺築地址から出土したもので，器高4.4cm，口径13.9cm，底径9.7cmの大きさである。高さ0.6cmの高台がつき，胴部は丸みをもって立ちあがり，口縁はわずかに外反している。高台の厚さは0.5cmであるが，内側部分と外側部分とではわずかの高低差があり，内側部分が高くなっている。そのため内側部分で杯身をささえている。表面には全体に水ひき痕がある。黄白色を呈し，焼きはやや弱い。

8も北辺築地址から出土したもので，器高5.9cm，口径17cm，底径12.9cmである。高さ0.6cmの高台をもち，胴部の立ちあがりは7にくらべて急である。口縁はごくわずかであるが外反している。内外面には水ひき痕があり，灰白色を呈し，焼成は良好である。

蓋―つまみのないものと，つまみを有するものとに区別される。

4は北辺築地址から出土したもので，器高3cm，口径13.5cmである。つまみを有しないもので，黄白色を呈し，焼きは弱く，表面が磨滅している。2や3の類の杯とセ

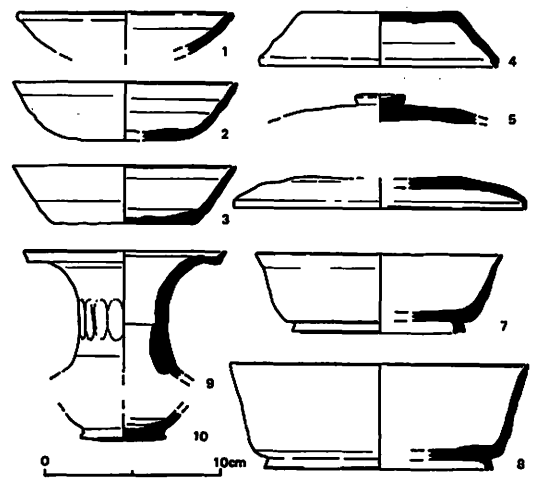
ットになるものと思われる。

5も北辺築地址から出土したものであるが，器高，口径とも不明である。つまみを有するもので，つまみの高さは0.6cm，つまみの上面径は2.2cmである。灰白色を呈し，焼成は良好である。

6は講堂址から出土し，口径16.4cmで表面には水ひき痕がある。つまみを有する思われるものであるが，つまみの部分は欠損している。灰黄色を呈し，焼成は良好である。

5，6は7や8の類とセットになるものと思われる。

壺形土器—9は講堂址から出土したもので，器高は不明であるが，口径11.4cm，頸部の長さ6.4cmである。口縁は外反しており，広口の長頸壺と思われる。口縁内面に特に水ひき痕がみられ，頸部の外面には指による調整痕とへらによる調整がなされている。頸部の下方では，はけによる調整もなされている。頸部の内面にはつぎ目がのこっている。灰色を呈し焼成は良好である。



第8図　出土緑釉・須恵器実測図

10は第5トレンチのPitから出土したもので，底部径4.7cm，高台の高さ0.6cmであるが器形は明らかでない。底部はへら削りによって調整し，中央部が縁よりわずかに丸みを帯びて高くなっている。内面には水ひき痕がみられる。青灰色を呈し，焼成は良好である。

緑　釉　陶　器（第8図1）

碗—北辺築地址から出土したもので，口径12.1cmであるが，下半部は欠損している。器高は高くなく，皿に近い浅い碗と思われる。口縁端はわずかに外反している。表面には水ひき痕がみられ，胎土は暗灰色をなし，きめが細かい。深緑色を呈し，焼成は良好である。

他に北辺築地址から1片，講堂址から1片の緑釉破片が出土しているが，器形はあきらかでない。

（脇坂光彦）

Ⅳ　ま　と　め

昭和45年度における発掘調査の対象としたのは石田茂作博士推定の講堂址，中門址および築地址，廻廊址であった。その結果，講堂址北辺基壇の一部および築地址があきらかになり，南北の寺域を確認する貴重な手がかりをえた。

つぎに本年度調査の概要についてまとめておきたい。

講堂址―北辺基壇の一部（約15m）があきらかになった。基壇は地山を削った上へ盛土をし，その周囲に１～３段の割石を積んでおり現高約30cmをはかるが，南側畦畔に残る礎石上面とのレベルからみて，元来は45cm前後の基壇高をもっていたものと推定された。

また，畦畔に残る３個の礎石を結ぶ線から基壇北側の雨落とみられる溝の中心部までは2.8mあり軒の出が約９尺の建物と推定できた。

築地址―講堂址北辺基壇より北，24mのところから検出された。築地は，上面が幾分削平されているが幅は1.8mあり両側に幅１mの溝がある。

築地中心部から溝の中心部までの距離は1.8mあり，軒先90cm前後の築地と推定できた。

中門址―昨年度の調査であきらかになった階段状基壇の西側を追求したところ階段端が検出された。しかし，今回の調査区の西側には，現国分寺の阿弥陀堂と築地塀があるため基壇の西端はあきらかにできなかった。

廻廊址―廻廊址検出のため設定した第１トレンチ南壁断面を観察すれば西端より２mのところから地山面がわずかに高まりをみせており，廻廊基壇とも推定できるが地山面は10cm前後の高低差しかなく，あくまでも可能性にすぎない。

以上のことから，築地址は石田茂作博士推定位置より10数m南へよっており，築地址から昨年度調査による南大門址，築地址までの距離は約128m（422尺）となり，この範囲が国分寺の南北の寺域とみてよかろう。

また，東西の寺域，講堂址東辺・南辺基壇，廻廊址などについては，昭和46年度の調査によってあきらかにしていきたい。

あ と が き

本概報は，伊吹尚，鹿見啓太郎，中田昭，脇坂光彦の分担執筆により，河瀬正利が編集した。

図面，遺物の整理にあたっては，上記のもののほか，金井亀喜，是光吉基，山県元，向田裕始（立正大学々生）の協力をえた。

昭和46年３月発行

安芸国分寺跡 —第２次調査概報—

発行　広島市基町10番５号　広島県教育委員会

印刷　朝日精版印刷株式会社